

キャンプ参加児童の保護者にみる費用対効用的評価

A Study on Economic Efficiency of Kids Camp

永 松 昌 樹

NAGAMATSU, Masaki

1. 緒 言

こどもの体力や運動能力の低下、自然環境下での運動やあそび体験の不足、さらにはこどもたちの間にみるコミュニケーション能力の欠如などが懸念されて久しい。このような社会的な情勢にあつて中央教育審議会（1998）は、こどもたちに必要となる「生きる力」に着眼し、体験教育の重要性を説いている。さらには生涯学習審議会（1999）においても“自然体験や生活体験が豊かなこどもほど道徳観や正義感が強い傾向が見られる”と報告し、自然環境のなかで育まれるカラダとココロについて体験的学習を振興する方策に取り掛かることを明記した。

ゆとり教育が見直されようとしている今日、中央教育審議会答申（2007）「青少年の意欲を高め、心と体の相伴った成長を促す方策について」では、今まで「豊かな心の育成」という視点で捉えられることの多かった自然体験活動について、「青少年の心と体の相伴った成長」という観点から、それらの意義を改めてとらえ直すことが必要であると記している。

わが国にみる自然体験活動は、YMCA に代表されるように青少年教育団体における先進的な取り組みによって発展し、学校教育機関でも広く展開されている。特に小学校においては、宿泊行事を取り入れる傾向が増しており、都道府県や政令指定都市、市町村教育委員会などが所管する野外活動施設における自然体験型プログラムへの学校単位での参加が促進されている。里山体験や農林漁業体験なども一例である。野外教育・野外活動自体が多面的思考の必要な時代を本格的に迎えているといっても過言ではない。

野外活動におけるキャンプ市場の広がり、消費者にとって選択肢が増えると同時に体験の機会も増す。しかしながらその反面、価格の設定は主催者の価値観や実情に応じて定められるのが主流で相場が見えにくいという問題がある。特に宿泊を伴うキャンプは時間とコストを要するため、キャンプ参加前後でのこどもの変化への期待感はかなり高いことが推察される。そして参加者のニーズも多様化の傾向が強くなっており、そのためキャンプに参加することによって得られる効用は個々人の目的に応じて価

表 1. 調査対象となった児童の参加したキャンプ

	A キャンプ	B キャンプ	C キャンプ	D キャンプ
日 程	H19.8.9～12 (3泊4日)	H19.8.12～16 (4泊5日)	H19.12.25～28 (3泊4日)	H20.3.26～29 (3泊4日)
対 象	小学3年～4年	小学1年～6年	小学6年～中学2年	小学1年～6年
人 数	23名	47名	23名	45名
募集方法	クラブ会員	公募	クラブ会員	公募
場 所	国立室戸少年自然の家 (高知県)	国立室戸少年自然の家 (高知県)	和歌山県立紀北青少年 の家 (和歌山県)	国立山口徳知少年自然 の家 (山口県)
内 容	カヤック、シュノーケ リング、O L、野外炊 事	カヤック、シュノーケ リング、O L、野外炊 事	ASE、野外炊事	秋芳洞、秋吉台見学、 和紙づくり、プロジェ クトアドベンチャー
参加費用	35,000円	39,800円	17,000円	33,000円

値観が異なる。

本研究では、費用対効用の視点に着目し、キャンプに参加した児童の保護者がキャンプ参加費用に対してどのような評価を下しているのかについて明らかにすることを目的とした。

2. 方 法

1) 対象となったキャンプの概要

平成19年度に実施された4つのキャンプに参加した児童の保護者を調査の対象とした。(表1)

A キャンプ・C キャンプはスポーツクラブで“サッカー”という一つの種目を中心に技能の向上を目指す団体が“合宿”という名目で開催したプログラムである。スポーツクラブ会員のみを対象に実施されたものである。B キャンプ・D キャンプは自然体験活動を推進するNPO法人が参加者を広く公募して実施したものである。各キャンプとも大阪から現地まで団体貸切バスを用いて送迎を行なった。プログラムの内容はA・Bは海浜水辺活動が中心であり、C・Dは山岳林間活動が中心であった。

A キャンプは、参加者23名(男児のみ)、スタッフ8名であった。参加費用一人当たり35,000円の内訳は、人件費8,960円(25.6%)、交通費15,435円(バス代他)(44.1%)、食費6,895円(19.7%)、プログラム費735円(2.1%)、宿泊費70円(0.2%)、諸経費1,225円(3.5%)、残金1,680円(4.8%)で

ある。海浜水辺活動を中心に、大阪では体験できない太平洋の大海原を身体全体で体験し、自然や環境への理解を深めることを目的とした。また、チーム力向上を図るため仲間と協力する活動(オリエンテーリング等)も実施した。

B キャンプは、参加者47名(男児21名、女児26名)、スタッフ18名であった。参加費用一人当たり39,800円の内訳は、人件費9,512円(23.9%)、交通費10,547円(バス代他)(26.5%)、食費9,393円(23.6%)、プログラム費2,070円(5.2%)、宿泊費438円(1.1%)、諸経費5,771円(14.5%)、残金2,070円(5.2%)である。A キャンプ同様海浜水辺活動を中心に行なった。参加者は初対面なので、交流会などを実施したりして、友達づくりができる機会をもうけた。

C キャンプは、参加者23名(男児のみ)、スタッフ3名であった。参加費用一人当たり17,000円の内訳は、人件費1,717円(10.1%)、交通費2,703円(バス代他)(15.9%)、食費6,001円(35.3%)、プログラム費221円(1.3%)、宿泊費3,145円(18.5%)、諸経費340円(2.0%)、残金2,873円(16.9%)である。このキャンプでは他のキャンプ(国立の施設利用)とは異なり県立の施設を使用しているため、宿泊費が他より多くかかっている。チーム力の向上を目指し、イニシアティブゲームなどのアクティビティを中心に行なった。参加者が小学校高学年と中学生だったため食費に多く費やしてい

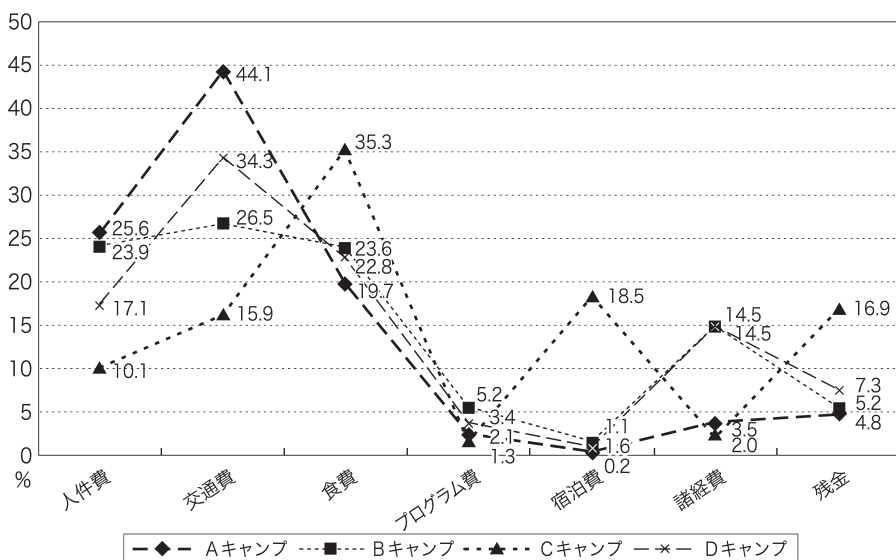


図1. キャンプ費用の内訳

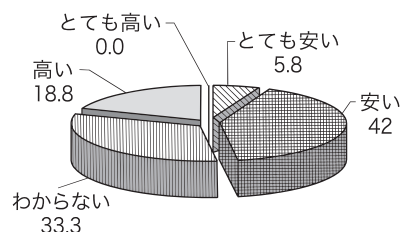
る。

D キャンプは、参加者45名（男児21名、女児24名）、スタッフ13名であった。参加費用一人当たり33,000円の内訳は、人件費5,643円（17.1%）、交通費11,319円（バス代他）（34.3%）、食費7,525円（22.8%）、プログラム費1,122円（3.4%）、宿泊費198円（0.6%）、諸経費4,785円（14.5%）、残金2,409円（7.3%）である。B キャンプと同様、参加者は初対面なので、交流会などを実施し、友達づくりができる機会をもうけた。また秋吉台ハイキングなどこの土地ならではの活動を取り入れた。雨天のため星空観察は中止とした。（図1）

2) 調査と分析の方法

アンケート調査は、キャンプの直後に郵送法にて実施した。質問項目は性別、年齢、キャンプへの期待と達成度、参加者の変容、今回の参加費用の妥当性、キャンプに対する感想（自由記述）などである。保護者のキャンプ参加費用に対する評価を明らかにするため、「今回の参加費用について（終了後総合的に判断したうえで）該当する番号に○をつけてください。」と問い、「1. とても安い 2. 安い 3. わからない 4. 高い 5. とても高い」の中から選択させた。さらに「そのように回答した理由はどうしてですか？」という項目を設定し、自由記述での回答を求めた。また「今回の参加についての感想」を自由記述形式にて記載を依頼した。

サンプルはキャンプの参加者、男児88名・女児50



□とても安い □安い □わからない □高い ■とても高い

図2. 今回の参加費用について

名の合計138名の保護者であり、郵送法により回収された有効標本数は76名分（55.1%）であった。

この研究でのアンケートに協力した保護者は、父親4名（5.3%）、母親72名（94.7%）、保護者の平均年齢は38.2歳であった。参加児童の性別は男児48名（63.2%）、女児28名（36.8%）で、児童の平均年齢9.9才であった。全体の回収率は55.1%（n=76）であり、内訳はA キャンプ14名（回収率60.9%）、B キャンプ24名（回収率51.1%）、C キャンプ16名（回収率69.6%）、D キャンプ22名（回収率48.9%）であった。

今回の参加費用への評価は「安い」（42.0%）、「わからない」（33.3%）、「高い」（18.8%）、「とても安い」（5.8%）、という順で回答が得られた（図2）。キャンプ別に見るとA キャンプでは「高い」と回答した割合が46.2%と高く、B・C・D キャン

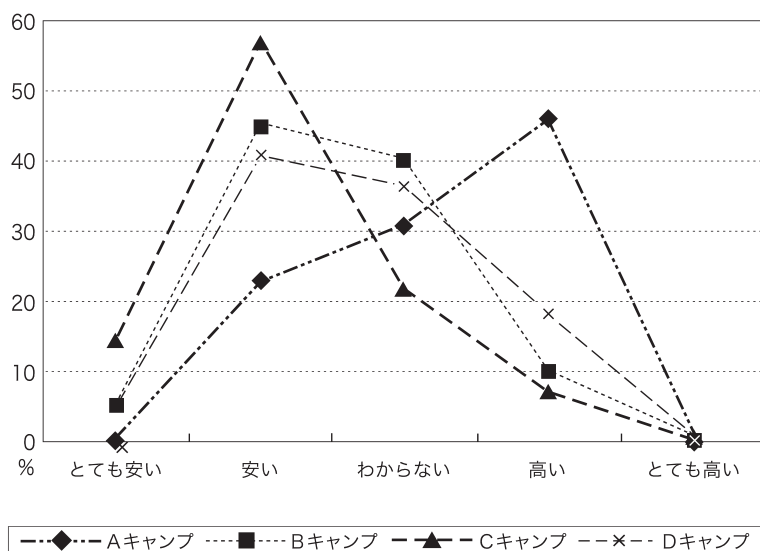


図3. キャンプ別、今回の参加費用について

表2. 満足評価の意見

(n=130)	内 容	とても 安 い	安 い	わから ない	高 い
こどもの変容 n=50	自信がついた/たくましくなった/積極的になった 自ら片づけをするようになった/規則正しい生活を送れるようになった 自然に関心を持つようになった/周りの人を気遣うようになった 今まで以上に友達と仲良く接するようになった/意見が言えるようになった	8	20	16	6
プログラム n=31	カヤックが楽しかった/和紙づくりが良かった/内容が豊富だった 今まで体験していないことが体験できた 家庭では体験できないことができた/近場ではできない体験ができた	4	18	8	1
こどもの様子 n=10	本人は思いっきり楽しんできた様子/笑顔で帰ってきた	0	7	3	0
自然体験活動 n=8	家族と離れての体験は参加費用の高低をつけられない キャンプ生活を通してサッカーにも影響があると思うから 自然の中では本来持っていなければならぬ大切なことに気づかされる	1	4	0	3
主催団体 n=5	こどもたちを十分みていただいたので リーダーがとても面白くやさしかった	1	4	0	0
食事 n=2	とてもおいしかった	1	0	1	0
その他 n=24	こどもも楽しかったし親もリフレッシュできたから 内容がよければ金額は問わない/ちょうどよい金額	3	11	8	2

ブでは安いと回答した割合が多くを占め、「とても高い」と回答した人はどのキャンプにおいてもいなかった。(図3)

参加費用に関して、「とても安い」、「安い」、「わからない」、「高い」と回答した保護者がどの項目に関してこのような評価を下したのかを明らかにするため、自由記述により得た意見をKJ法により分類し検討した。意見の抽出は、1人(1サンプル)分の意見についても、内容的に複数に分かれるものは分解して分類するものとする。記述内容は185ケースであり、キャンプの内容について肯定的な印象を持っていると考えられる記述(以下、「満足評価」とする)と、それ以外の意見(以下、「不満足評価」とする)とに大別したところ、満足評価が130ケース、不満足評価が55ケースであった。

3. 結果と考察

1) 満足評価

満足評価では、費用に対して「とても安い」と回

答していた保護者から18ケース、「安い」と回答した保護者から64ケース、「わからない」との回答した保護者から36ケース、「高い」と回答した保護者から12ケースの記述を得ることができた。

内容をみると「こどもの変容に関すること」「プログラムに関すること」「帰宅時のこどもの様子に関すること」「主催団体に関すること」などに分類できた。満足評価として分類できる回答を記した保護者の意見は上表2のとおりである。

「こどもの変容」に関する内容が満足評価にカウントされた意見全体の約半数を占める結果となった。保護者はキャンプに参加した児童が、「自信を持つ」「たくましくなる」「積極的になる」などの精神的な発達した様子を感じ、さらに「片づけをする」「規則正しい生活を送る」といった生活技術の向上を見出し、また「周囲の人に気遣いができる」「今まで以上に友達と仲良く接する」「自分の意見が言える」といった社会性に関わる成長などを認めている。すなわち、このような精神的・生活技術面・社会性を保護者が期待しており、その変容にキャンプ費用を

表 3. 不満足評価の意見

(n=55)	内 容	とても 安 い	安 い	わから な い	高 い
プログラム n = 13	楽しみにしていた天体観測ができなかった 詳細がわからない/風呂の時間が短かった	3	4	5	1
主催団体 n = 11	集合時、緊張しているこどもに声かけをしてほしかった 予定の変更は早めに知りたい/出発時間を守ってほしい	0	3	3	5
実施場所 n = 8	場所が遠かった 割安な施設を利用しているはず	0	1	3	4
日程 n = 5	2泊3日は長い おけいこごとに影響がでる日程だと参加させにくい	0	0	4	1
子どもの様子 n = 5	警戒心が必要以上に強くなった キャンプに参加したかったからといって特に変化はみられない	0	0	1	4
食事 n = 4	食事が足りなかった/ご飯が固かった	1	2	1	0
その他 n = 9	安くなければうれしい/会計報告してほしい 数日間で使う金額にすると高い	0	0	4	5

投資し効果が認められたと判断していると考えることができそう。

「プログラム」に関する意見では、プログラム内容そのものに対するものだけでなく、「家庭では体験できないことができた」「近場ではできない体験ができた」など野外活動施設での活動自体への満足感が記され、「今まで体験していない体験できた」「カヤックが楽しかった」「和紙づくりができた」など初めて体験する内容への好印象が述べられている。野外活動や野外教育への参加に対して特にそのプログラム内容への期待感がそのまま保護者の満足感へと結びついている様子が窺うことができる。

一方、プログラム内容を特定せずに判断の対象としている意見では、「本人（参加児童）が思いっきり楽しんできた様子」「笑顔で帰ってきた」など、児童の表情や様子を好ましく感じたという記載もみられた。また、「キャンプ活動を通してサッカーにも影響があると思うから」といった参加団体での取り組みとの関連する記載もあり、「自然の中では本来持っていなければならない大切なことに気づかされる」というように児童たちの日常では学ぶことが難しい経験への満足評価が示されている。

満足評価と費用に関する記載もみられた。「家族と離れての体験は参加費用の高低をつけられない」「内容がよければ金額を問わない」「こどもも楽しかったし、親もリフレッシュできたから」といった参加費用と児童をキャンプ参加へと導いた保護者の期待感との関連に言及する保護者も存在した。

2) 不満足評価

不満足評価に関する意見について満足評価と同様に分類した結果、「とても安い」と回答していた保護者から4ケース、「安い」と判断した保護者から10ケース、「わからない」と費用との関係性を判断しかねている保護者から20ケース、参加費用に対して「高い」と回答した保護者から21ケースの記述を得ることができ、「高い」と回答した保護者からの意見の割合が多かった。

内容をみると「プログラムに関すること」「帰宅時のこどもの様子に関すること」「主催団体に関すること」などに分類できた。不満足評価の回答を寄せた保護者の意見は上表3のとおりである。満足評価と同様に不満足評価でも「プログラム」の内容に関する記述が多くみられた。「楽しみにしていた天体観測ができなくて残念がっていた」「予定に聞いていた内容のものが実行されず本人ががっかりしていた」など、プログラムの内容についてその実施が回避され、期待の達成度に至らなかったために不快感が生まれていると考えられる。

「主催団体」に関する内容では、「予定の変更は早めに知りたい」「無事着きましたメールをメーリングリストで流して欲しい」といったスポーツクラブ会員だからこそできる連絡伝達による今後に対する要望（A キャンプの保護者）から、「スタッフの質は下げずに費用は下げて欲しい」「集合時、緊張しているこどもにもっと声かけしてほしい」といった家族から離れる児童へのケアとともに保護者への詳細な報告や連絡に対する期待に応じてもらえな

かった不安感が不満足評価に結びついている状況を示している。

帰宅後にみられる児童の様子でも「警戒心が必要以上に強くなった」「キャンプに参加したからといって特に変化はみられない」というようにキャンプへの参加で精神的・生活技術面・社会性における発達や向上が顕著でないばかりか、停滞や場合によっては後退してしまうと不快な要素として不満足感をもたれてしまう。

さらに満足評価では指摘がなかった「日程」や「場所」に対する記述もみられた。「(バスでの)移動の時間をもう少し短くし、費用を抑えて欲しい」「(実施開催日に)バスの事故(の報道)があり、距離(集合場所からキャンプ実施の場所まで)が長くて心配だった」など、場所そのものではなく、それにかかる移動時間やそれに伴うリスクに対する不安感が不満足評価として記されていた。

4. ま と め

本研究は、キャンプに参加した児童の保護者を対象に、キャンプ参加に対する参加費用に関してどのように評価しているか自由記述をもとに検討した。保護者は様々な要因によりキャンプ参加費用について評価しており、特に「こどもの様子」や「こどもの変容」、「プログラム」に関することにより判断の基準としていることがわかる。また、クラブの事業として実施する場合と公募により自然体験活動推進する団体が実施する場合での費用の運用は異なるが、参加児童の多くの保護者は、“より安く・より安全に・より楽しい”ものを求めている。しかしながら、その一方で、「参加費用の妥当性」と「実施するキャンプの目的とその効用」について、事前に保護者と参加児童に周知し、キャンプ参加後の児童が家族のもとへ戻り、普段の生活のどのような場面でどのような姿や行動で示されるのかを明示することの重要性が伺える。

自然の中でこどもたちが集団で活動するキャンプはこどもの成長や発達にとって貴重な経験値にかかわるものであり、キャンプ参加に対する費用の意識を直接的な金銭に換算しとらえることは困難であるが、キャンプ参加費用に関しては、キャンプの活動自体だけでなく、こどもの変容や日常生活への取り組み方など貨幣価値として測定できないさまざまな欲求に対する効用について検討を繰り返すことが不可欠である。

付記

本稿は、相奈良律研究員(大阪YMCA総合研究所)ならびに横山誠先生(大阪国際大学)との共同研究の成果である。

参考文献

- 江橋慎四郎編; 野外教育の理論と実際、杏林書院、1987。
- カロリン・シェーファー&エリカ・フィールダー著、遠州壽美・遠州敦子訳; シティ・サファリ、都市文化社、1989。
- Cathye Haddock; Managing Risks in Outdoor Activities, New Zealand Mountain Safety Council Inc, 1993。
- Chris Hopper; The Sports-Confident Child: A parent's guide to helping children, Pantheon Books, New York, 1988。
- Harvey C. Perkins & Grant Cushman; Leisure, Recreation and Tourism, Longman Paul Limited, Auckland, New Zealand, 1993。
- マイケル・ノートン著、グループ99訳; 僕たちの街づくり作戦、都市文化社、1993。
- 日本野外教育研究会編; 野外活動テキスト、杏林書院、1988。
- Rainer Martens; Joy and Sadness in Children's Sports, Human Kinetics Publishers Inc, 1978。